

過去の学びから知財取得を徹底 地域資源、林業、そして環境に資する製品の需要拡大を目指して

事業内容

1974年設立（創業は明治35年ごろ）
製材の開発・販売
独自商品『しっかり支柱』の販売

知的財産権と内容

意匠第1577942号	杭
意匠第1578947号	杭
意匠第1578948号	杭
意匠第1696174号	獣類侵入防止柵
商標第5940015号	しっかり支柱

他 意匠権8件

(2024年11月現在)

ACTIVITIES & ACQUISITION IS INTELLECTUAL DATA



代表取締役 平井 賢治さん

4代続く製材会社として 業界全体を見据えた事業を展開

当社は平井代表で4代目を迎える、老舗の製材会社である。初代の頃は地道な木挽き（のこぎりで原木を切り出す作業）が主体だったが、2代目になると木材の卸売市場を経営するようになり、販路が大きく拡大した。その後昭和40～50年頃には東京オリンピックの関係で住宅ブームが起こり、3代目の時期までは好調が続いたという。しかし、昭和50年代半ばになると外材の普及により、製材業界が窮地に立たされる。そこで、国産材ならではの製品を造ろうと、徳島県内の木材・製材グループ15社ほどが協力して取り組んだのが、「波釘を打ち、強度を増した足場板」だ。これは当社においてもヒット製品となったものの、平成に入ると後発企業の発生により売上が低迷。会社を受け継いだ平井代表は新たな自社の強みを模索し、アイデアマンとして地元相生杉（あいおいすぎ）を活かした合板やデザイン性の高い木材、商標も取得した『しっかり支柱』など様々な製品を生み出した。今後も「国産杉の大径木の需要拡大」を目標に、同業者や商社とも連携しながらさらに活躍の場を広めていく方針である。

過去の後悔から新製品開発の際には 積極的に知財を取得

「知財を意識したきっかけは、より安価な足場板を販売した後発企業に市場を席捲された時だった」と平井

代表は話す。当社が足場板の権利化を意識した時には、新規性の観点からすでに特許が取れないフェーズに入っていたそうだが「早く権利化していれば市場を失わなかったのでは」と後悔したという。その後、主に鹿による獣害を防ぐための防護柵『しっかり支柱』を開発。従来から、支柱はプラスチックやグラスファイバーで製造されるのが定番であるが、山中に設置した後、回収や処分が課題となっていた。そこで本製品は国産材である相生杉を用いることで、軽くて運搬しやすく、かつ環境にもやさしい仕様を実現。名称は、高知県の方言である「しっかりしちゅう（意：しっかりしている）」を“支柱”にかけたもので、キャッチーな響きに仕上げた。知財については開発時から意識し、会員として所属している（公財）とくしま産業振興機構の窓口を通して紹介を受けた弁理士に相談。幸い、当社の仕事内容や目的を理解した上で、前向きな提案をしてくれる相性のよい専門家と出逢うことができた。一般的には複雑な手続き関係も、信頼する弁理士に任せられたため苦労は少なかったそうだ。

知財は「ものづくりに必ず求められるエッセンス」

平井代表は「知財はものづくりに必ず求められるエッセンス」と考えているといい、「アイデアを証明する本質的な要素であり、会社を繋いでいくために重要だと認識しているからこそ、費用や手間がかかっても開

発の際には取得を検討したい」と話す。こうした考えに至ったのは、長く信頼関係を構築している弁理士と縁が生まれたのも大きいという。相性の良い弁理士を探すのは苦労もあったそうだが、会社を守りたい、製材業界を盛り立てていきたいという誠実かつ前向きな想いが実を結んだ。今後も企業価値向上の一環として、後継者や人材育成を検討する上でも知財を活用していく意向である。

売上への苦心が ライセンスビジネスの道を開かせた



知財を活用する上では「取得した知財を、売上につなげる」ことが課題となっている。当社は自治体が取引先となることが多いが、作業コストなどの面で取引のハードルが高くなりやすいという。そこで平井代表は、知財取得のカギでもある当社製品の付加価値、つまり元の素材から木材に変更するメリットは何かを改めて考えた。結果「県産材を使うことで、多くの自治体が課題とする木材需要の拡大に貢献できること」であると気づき、ライセンスビジネスとして自社の技術を活用する方法を発想。



軽量で扱いやすいため、1人でも比較的簡単に施工可能な『しっかり支柱』

現在は資材を扱う商社とタッグを組み、製品の魅力を伝えながら、導入費用等について各自治体等と交渉を進めている。

知財取得を目指す経営者へのメッセージ

注目!

「新しいものを作ろう、と考えた時には、権利化をイコールとして想定した方がいい。知財は自らのプライドを守り、仕事のやりがいを守る上で大切な財産となるため、積極的な取得を勧めたい」と平井代表は話す。また「本来は社内が一丸となり、チーム体制で取り組むべきだが、経営者は一人でリスクを抱え込んでしまいやすい。しかし、中国に“飲水思源”（井戸の水を飲む際には、掘った人の苦労があることを忘れない）という故事成句があるように、双方の立場の人々がしっかり情報を共有することで、苦労を分かち合えることもある。これは当社にとっても自戒となっている。これから取得する方は後悔がないように頑張ってもらいたい」と併せて語った。



相生杉は赤身と白太のコントラストが特徴的で、断面も美しい



知的財産活用のポイント

知財に留まらず 木材の可能性を広げる取組

当社では知財だけでなく、製材の安定した品質を示すJASマークも取得しているほか、世界的に活動が広がっているSDGs（持続可能な開発目標）にも力を入れている。営業活動においては、こうした環境問題や社会貢献に対する企業の真摯な姿勢を評価

されることも多い。今後は大径木のさらなる循環利用、利用拡大を行うべく、従来は杉材を採用されることが少なかった「フローリング」への活用を進めていく予定だという。柔らかく滑らかな質感や高い調湿効果など、杉の魅力を広めたい…そんな想いと、平井代表の豊かな発想力が、新たな木材の活用に繋がっている。

COMPANY DATA

取材：2024年11月

企業名：有限会社平井製材所 所在地：徳島県那賀郡那賀町谷内字中分54 電話番号：0884-62-1005

URL：<https://hiraiseizai.com/> 創業：1902年 資本金：1500万円 従業員：9名

